

悪論と神話論のあいだ

——シェリング『世界の年代』（Weltalter）の射程

菅 原 潤

問題設定

シンポジウムのタイトルと、および拙稿のタイトルについての説明から始めたい。まずはシンポのタイトル「哲学と宗教」だが、このタイトルはもちろん言葉通り「哲学」と「宗教」という隣接分野の対話を目指すという意味で受け取れるものの、シェリング研究者の専門家の眼からすると、どうしても『哲学と宗教』という中期シェリングの著作を連想させるため、この著作に言及しなければならない印象を受けた。幸い「哲学と宗教」については岡村発表者のタイトルに入っているので、拙稿では『哲学と宗教』に言及せずに、これに続く『人間的自由の本質』、一般に『自由論』と呼ばれる著作から話題にしたい。周知のように『自由論』のテーマは悪なので、拙稿のタイトルに「悪論」がついているのは、そういう意図があつてのことである。

次に訳語の問題である。周知のように‘Weltalter’には定訳がない。かつて「世代」と言われた時代があつたが、これだと‘generation’との見分けがつかない。あるいは「世界の時代」や「世界時代」と言われた時期もあつたが、この訳語は「縄文時代」とかピカソの「青の時代」などを想起させる可能性がある。最近では松山壽一が「世界歴年」という訳語を提案したが[松山 2013:30]、この語もどこか収まりがよくない印象を与える。‘Weltalter’の議論からは月日が流れると同時に、その月日が積み重なるという2つのイメージが読み取れるので、本稿では「世界の年代」が訳語として適当だと思い、以下ではこの訳語を使用する。この訳語が果たして適切かどうかは、総合討論で話題にしてもらいたいと思う。

もう一つ神話論との関係の問題がある。周知のように『世界の年代』には3つの草稿があり、そのうち第3稿は小シェリング版の全集に収められたため古くから知られていたが、これに先行する2つの原稿はようやく20世紀に入ってから発見され、普及版のシェリング全集を編集したマンフレート・シュレーターにより、別巻の枠内で2つの原稿が収められた。そこでこれら3つの原稿を照合すると、なるほど第3稿の議論はまとまってはいるものの、当時のシェリングが取り組んでいた積極哲学の前段階として全体の議論が整理されているため、生彩の乏しい印象がつきまとうのに対し、第1稿と第2稿では『自由論』の議論を発展させようとする意気込みが感じ取れる。

第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter* を基盤として」シンポジウム】

そもそも『世界の年代』においてシェリングは、過去と現在と未来の3巻からなる時間論を提示しようとするが、実際には過去の巻が3回試みられたのにとどまった。その理由は現在でも判明しないが、本巻所収のマルクス・ガブリエル教授の講義の刺激を受けて、『世界の年代』において過去の取り扱いが2通りあることを思い出し、そのうちの1つが後期の『神話の哲学』に継承されているという仮説をここで提起したい。拙稿のタイトルに「神話論」が示されているのは、こうした事情ゆえのことである。

したがって、本稿のタイトルを「悪論と神話論のあいだ」としてことには『世界の年代』の前後に『自由論』と『神話の哲学』があるという、年代記的な事実を示したい意図が1つある。ただしこのことは『世界の年代』が過渡的な存在だということを意味しない。というよりも「悪論」と「神話論」という、どちらかといえば一見すると関係のない2つの問題が『世界の年代』の時間論により結びつけられることに、今日で言うところの多文化共生論的に意味深長な事情が隠されているのではないかと考える。

先行性としての悪——『自由論』の悪論

まずは『自由論』における悪論の取り扱いである。しばしば『自由論』はシェリングのなかでもっとも有名な著作と位置づけられるが、シェリングがこれを書いた動機には、さまざまあると言われてきている。フリードリヒ・シュレーゲルが『インド人の知恵と言語について』においてシェリングを汎神論者として攻撃している旨のことが『自由論』に書かれているので、シュレーゲルを反駁することがその動機だと言うことができるし、あるいはハイデガーがそのシェリング論で言うように、ヘーゲルの『精神現象学』の序論で言われている有名な「すべての牛が黒くなる闇夜」とされた同一哲学批判に対する回答をシェリングが意図していたとも言える[ハイデガー2011:21～24]。ここでは『自由論』が展開する原理論的考察から推測して、カントの形式的な自由概念の改定を目指したと考えたい。

周知のようにカントは自由を、純粋実践理性による自己立法として定義する。自己立法とは感性的な動機や仮説的な原因を交えずに、純粋に理性による規定をおこなうことである。カントはこれを意志の自律とか定言命法と呼ぶが、ここで注意したいのはカントが必ずしも感性的なものを罪悪視したわけではないということである。カントは実践理性の純粋さを強調する一方で、具体的な行為の場面では感性を動機とする格率の契機を重視するからである。けれども「信条が普遍的法則となることを、当の信条を通じて自分が同時に意欲できるような信条に従つてのみ、行為しなさい」[カント 2000:53～54]と定式化することで知られるように、感性的な動機づけはあくまでも純粋実践理性の自己立法と合致するかぎりでは認められるにとどまり、普遍的立法から離反する感性的契機は悪への性癖と消極的に規定される。こうした感性的契機

の位置づけにシェリングは不満を感じ、シェリングは『自由論』において実質的な自由概念を模索することとなる。

それでは実質的な自由概念とは、一体どういうものか。シェリングはこれを「善と悪の能力」と規定する。もしも善をなすことだけが自由であれば、自由には他に選択肢がないこととなり、必然性で見分けがつかなくなるので、実質的な自由を考えるにはどうしても善だけでなく、悪をなす選択肢も与えよと言うわけである。かといって悪を推奨してしまえば、今度は善をどういう位置づけにするかの問題が随伴してしまう。それゆえ悪の契機も配慮しつつ、善を選択するにはどうすればいいかというのが、シェリングの自由論の構え、とりわけ悪論の構えである。

ここで出てくるのが、有名な「実存するかぎりでの存在者」と「実存の根拠であるかぎりの存在者」の区別である。注意しなければならないのは、この区別は『わが哲学体系の叙述』における自然哲学に関連するものだとシェリングがわざわざことわっていることである。なぜなら後で検討する『世界の年代』において収縮力と拡張力の関係が話題になることから推測できるように、シェリングの『自由論』や『世界の年代』は『わが哲学体系の叙述』に代表される同一哲学から完全に訣別したのではなく、むしろ同一哲学期の自然哲学の概念を用いて、同一哲学期では十分に語れなかった精神哲学を論じているという傾向が見られるからである。先ほどの2つの存在者の区別に引き続いて、実存の根拠は「神のうちの自然」と言い換えられ、そしてそれがポテンツ論の文脈に置かれることで、この傾向が裏づけられることとなる。

それでは実質的な自由概念を論じる際に、シェリングはどのようにしてポテンツ論を援用するのだろうか。そこでシェリングは「憧憬」という、どちらかといえばロマン主義的な香りのたどよう概念を説明項として導入する。憧憬とは求められるものがまだ得られていない現状と、求め続けても求められるものが得られないのではないかという未来の予感のあいだを行き来する運動だと考えるとよい。このことをシェリングは「根源的な憧憬は——ちょうどわれわれが憧憬のなかで未知の、いまだ名前をもたない善を求めるように——いまだ知ることのない悟性へと向かう」と表現する。そしてこうした憧憬に対応して「神自身のなかに、一つの内的な、そして反省的な表象が生まれ」これが「憧憬の言葉」だと言い表される[VII,361 シェリング 2011:109]。ここには『世界の年代』で時間論との絡みで論じられる命題論の萌芽がすでに認められるので、そのことにより「憧憬」が必ずしもロマン主義的に処理されるべきではないことが含意されるが、とりあえずはこうした憧憬に関する叙述から『自由論』の悪論についてまとめておく。

憧憬論で描かれているのは「暗闇から光への誕生」である。こう表現すると、光と暗闇がそれぞれ善と悪のメタファーであるかに受け取られるが、実情はもう少し複雑である。ここでシェリングは善悪を意志の観点で把握することを試みる。人間のうちなる我意が普遍意志と変容

第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter* を基盤として」シンポジウム】

し、これに呼応して本来我意であるものが根底にとどまっている状態を、シェリングは善と名づける。これに対して我意が普遍意志へと変容せず特殊意志にとどまれば、本来なら根底にとどまるべき闇の原理が光の原理を圧倒することになる。これをシェリングは悪と呼ぶ。つまり善と悪とは何らかの独立した原理の呼び名ではなく、憧憬において行き来する力の上下関係により規定されるものである。

『自由論』の議論の枠組みからいささか外れるが、シェリングが生前最後に公刊した『神的事物とその啓示』にここで言及する必要がある。この論考はシェリングの自然哲学的着想が無神論的だと論難するヤコービの批判に応えたもので、当初は闇の原理が光の原理を圧倒するものの、徐々に両者の関係は逆転して、最後は光の原理が闇の原理を支配すると言うことで、最終的には有神論的な主張に落ち着く旨の話をしている。この議論を援用すれば、『自由論』で言われている最初の闇の原理が光の原理を圧倒する先行性 (Priorität) が悪で、逆に光の原理が闇の原理を支配する卓越性 (Superiorität) が善だと言い換えることができる。

改めて注意しておきたいのは、当初の世界は悪だということをシェリングが間接的に認容していることである。このことは後述するように、啓示の世界に比して神話の世界が悪だということを示唆するわけだが、それでは神話の悪とはどういうものかを考えるには、『世界の年代』の時間論を検討しなければならない。

『世界の年代』の時間論

先ほど『世界の年代』の草稿は3種存在すると書いたが、それらのいずれの草稿も「過去は知られ、現在は認識され、未来は予感される。知られたものは物語られ、認識されたものは叙述され、予感されたものは予言される」[Ⅷ,199, I,3, II,3]という詩的な表現で書き始められている。この表現からだけでも『世界の年代』が時間論の展開だということは容易に知られるが、重要なのはこの時間論に命題論が結合されていることである。

シェリングの命題論は『世界の年代』の第2稿において次のように精緻化される。

あらゆる判断の真の意味は、例えば〈A は B である〉という判断の真の意味は、以下の通りでしかあり得ない。つまり〈=A であるものは、=B であるものである〉。〔中略〕引き合いに出された命題に本来的に含まれているのは3つの命題である。第1には〈A は=X である〉、第2には〈B は=X である〉、これからようやく〈A と B は同一であり、すなわち両者は同一の X である〉という3つの命題が含まれる[Ⅱ,41]。

そしてこの三つの命題の関係を解明するため、ホクレーベという現在の『世界の年代』のスタ

ンダードな読解を行なう論者によって「代名詞的存在 (pronominales Sein)」と「述語的存在 (prädikatives Sein)」という聞き慣れない術語を導入される。

われわれはすでに、まだ世界が存在する以前になにか或るものであるような何かをもって
いる。つまり絶対的に無規定な〔中略〕何か或るものというフィクションは、すぐに二重
性へと分解されてしまっている。その一方の何か或るものとは、われわれが代名詞的存在
と名づけた〔中略〕ものであり〔中略〕、もう一方の何か或るものとは、われわれが述語
的存在と名づけた〔中略〕ものである[Hogrebe 1989:83f.]。

非常に難解なことを言っているように受け取れるかもしれないが、ヨーロッパ語圏の文法の常
識を丹念に追跡すれば、ここでホクレーベは意外にも文法的に常識的なことを言っていること
が判明する。

まずは「代名詞的存在」である。周知のように代名詞とは述語になれないが主語にはなれる
品詞である。例えば「これ」とか「私」といった代名詞は、主語になることができる。けれど
も「これ」や「私」が指し示す内容は、時間と場所が変われば変化する。このように代名詞の
指示対象が確定しないことは、何らかの否定性が代名詞に含まれていることを含意する。こう
した否定性をともなった存在をホクレーベは代名詞的存在と呼ぶのであり、この代名詞的存在
に相当するのが『自由論』では実存の根底、『世界の年代』では収縮力である。これに対して
「述語的存在」は逆に、文字通り述語にはなるが主語になれない存在を言う。ここで注意した
いのは「述語的存在」とはあくまでも述語を求めている状況にとどまり、述語づけがまだなさ
れていない存在だということである。こうした述語的存在は『自由論』では憧憬、そして『世
界の年代』では — 後述する『自由論』において無底と結びつけられる愛とは意味合いが異な
るが — 愛と呼ばれる。

こうしたことを背景にして、先ほど『自由論』を論じる際に登場した「根底」「暗闇」を「代
名詞的存在」、「憧憬」を「述語的存在」と言い換えると、「憧憬」とは自分自身を言い当てる
述語を探し求める状況と、他方ではそういう術語など存在しないかもしれないと思って暗闇へ
と閉じこもる状況を行き来するものだと言及することができる。そしてそうした述語を言い当
てる状況に達することが「二力の分開」であり、そこから「永遠な精神」が現れるというわけ
である。

さらにホクレーベは「代名詞的存在」と「述語的存在」に加えて「命題的存在」という概念
を導入して、『世界の年代』の第3稿につぎのような注釈をつける。

第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter* を基盤として」シンポジウム】

統一[つまり、命題的存在 (propositionale Sein)]が存在者であれば、対立、すなわち対立し合うもののそれぞれ[つまり、代名詞的存在と述語的存在]が存在者でないものでしかあり得ず、したがって対立し合うものの一つであるがゆえに対立[つまり、代名詞的存在と述語的存在]であるものなので、統一[つまり、命題的存在 (propositionale Sein)]は存在者でないものへと後退せざるを得ない[Hogrebe 1989:88]。

この注釈付きの引用箇所を考慮したうえで、先に挙げた『世界の年代』の第2稿の引用箇所を解釈すると、次のようになるだろう。つまり〈A は B である〉という命題は〈A は=X である〉と〈B は=X である〉という、それぞれ A や B といった述語づけを求める存在と、そうした述語づけをこぼむ存在のせめぎ合いのあった状況を〈A と B は同一であり、すなわち両者は同一の X である〉という命題的存在によってつなぎ止めるものだと解釈できるのではない。ここで注意したいのは〈A は=X である〉と〈B は=X である〉をそれぞれ第1ポテンツ、第2ポテンツと見なしてはならないということである。代名詞的存在と述語的存在がせめぎ合っている状況が第1ポテンツであり、述語的存在が受け入れられている状況が第2ポテンツであると解されるべきである。とはいえその第2ポテンツも、命題的存在たる第3ポテンツを介して落ち着いた位置に収まっていると考えるべきだろう。

『世界の年代』における2通りの過去

それでは後期神話論のことを念頭に置きつつ『世界の年代』における過去論の扱いについて考察することとする。シェリングは述語的存在が現在存在するものとして定立されるのと相関的に、代名詞的存在が過去として定立されると考える。つまり過去は過去自体として独立的に存在するのではなく、現在とは相関的に考えられなければならない。考える順番としては先に現在があり、その後に過去が事後的に定立されるというわけである。このことを指してシェリングは「人間にとって有益で役立つのは、いわば何かを自らの背後に、つまり過去として定立したという意識である」とか「自らを自らよりも高める力をもつ人間だけが、真の過去を創造することができる」[II,23]と言う。ここで「真の過去」という言い方が出てきたことに注意して、次の文章を注意深く読まなければならない。

自らの過去に自らを対立させることのできない人間はまったく過去をもたないのであり、あるいはむしろ過去から抜け出せず、つねに過去のなかで生きている[I,20]。

先ほど真の過去は、現在と相関的に定立されると述べた。その場合の「過去」は「自らの過去」

と「まったく過去をもたない」という際の「過去」、「過去から抜け出せず」の「過去」に相当する。けれども最後の「過去のなかで生きている」の「過去」は「真なる過去」とは異なる。ヴィーラントはここで2通りの過去が述べられていると言う[Wieland 1956:35f.]。

繰り返しになるが「真の過去」は現在との相関関係で定立されるのであり、定立されることで人間は「過去」から抜け出すことができる。それゆえ抜け出せない状況は、厳密に言えば「過去」だと言うことはできない。けれどもわれわれは、ある忌まわしい経験をしたためトラウマ的な精神状態に入って、なかなか前に進めない精神疾患のある患者が存在することを承知しているⁱⁱ。あるいはジャーナリスティックな言い方になるが、日本はいまだにきちんとした歴史認識をもてないために周辺諸国から批判を受けて、戦時中の状況から抜け出せないでいるⁱⁱⁱ。こうした状況が後者で言われる「過去」であり、前者の「真の過去」と較べれば「偽りの過去」ではないのか。

『世界の年代』の文脈に話を戻せば、この「偽りの過去」が命題論との関連で述べた、述語づけを求める存在とそうした述語づけをこぼむ存在のせめぎ合いのあった状況である第1ポテンツであり、もっとさかのぼれば『自由論』で言われる悪の状況である。けれども『自由論』では、闇の原理が光の原理を圧倒する先行性として悪を1次元的に捉えられたのに対し、『世界の年代』では第1ポテンツが「自分のなかを駆けめぐる狂気のような輪」(I,125)という具合に、2次元的に表現されている。言うならば肯定するかと思えば否定し、否定するかと思えば肯定するという堂々巡りの状況が、第1ポテンツなのである。『世界の年代』ではこうした堂々巡りの後に述語的存在を得て現在へと到達する見通しを語るわけだが、その際に堂々巡りをする過去と前に進む過去という、2つの過去が提示されているのは、その後のシェリング哲学の展開を考えると実に興味深い。

なぜ興味深いのかと言えば、『世界の年代』の後の『エアランゲン講義』では2種類の過去のうち堂々巡りの過去が強調されたうえで、そうした過去とは一線を画すエクスターゼが主張されるからである。つまり『世界の年代』で追求された述語づけを求める活動の探究が、『エアランゲン講義』でいわば反故にされるというわけである。冒頭でガブリエル教授の講演を聞いて、シェリングには2通りの過去があることを思い出したと書いたが、その理由は『世界の年代』の述語づけの議論は「後退停止装置 (Regreß-Atopper)」であって、そこで永遠性ないし無底が求められていると教授が示唆したことを受けて^{iv}、そうだとすれば『エアランゲン講義』の議論は、その「後退停止装置」を外した状況をではないかと思い当たったからである。私見によれば、この無限後退する状況こそが『神話の哲学』で論じられる継起的多神論に他ならない。

神話論の視点

通常神話論では複数の神々が語られるので、神話論は暗黙裡に多神論と同一視されるわけだが、このことに呼応して啓示宗教ではアラーとかエホバといった唯一の神が信仰の対象とされるので、通常なら啓示宗教と一神教は同義だと見なされる。けれどもシェリングは、多神論が最初から多神論だとは考えない。ユダヤ教とかイスラム教といった一神教にかぎらず、世界各地の宗教はそれなりに唯一の神を信仰するのだが、時間が経つにつれてその支配的な神が次第に勢力を失い、やがて別の神が唯一なる神として信仰されるようになる。けれども新たな神が台頭することで以前の神が完全に滅びることはなく、以前支配的だった神が集積して、それらをまとめて多神論と捉えるべきだとシェリングは捉える。こうした捉え方をシェリングは継起的多神論（der successive Polytheismus）と呼び、その例としてウラノスからクロノス、クロノスからゼウスへと支配的な神が交替するギリシア神話を挙げる。

こうした多神論の捉え方と、先ほど『世界の年代』で扱った述語づけの議論をすり合わせる、神話論と啓示宗教は一見すると対立関係にあるが、当初はいずれも唯一なる神を問題にすることを考慮すれば、両者のあいだで対話の可能性が開かれることになるだろう。また神話のなかでしばしば世界の起源のみならず悪の起源がたびたび問題になることを念頭に入れながら、改めて『自由論』や『世界の年代』の議論に向き合うと、悪の起源として語られている事態が闇の原理が圧倒し堂々巡りにいたる状況と符合することが知られるし、またさまざまな神が交替する時間の流れが、まさしく「過去のなかで生きている」状況だと理解されることだろう。

なるほど『エアランゲン講義』で論じられるエクスターゼが啓示宗教だけに見られる現象かどうかの問題は未解決なままだが、ハンス・ヨーナスの著作を参照するまでもなく、ヨーロッパの後期古代ではそれぞれヘレニズムとヘブライズムの流れを汲む新プラントニズムとグノーシスが生産的な対話をしていることが確認できるし[ヨーナス 1986]、またシェリングが卒業論文でグノーシスの重要な論者の1人であるマルキオンを論じていることを考慮すれば、『世界の年代』の問題設定を念頭に置きながら彼の神話論とグノーシスを突き合わせれば、新たな宗教哲学の地平が開かれるのではないだろうか。

略号

シェリングからの引用は『世界の年代』の前二稿を除いて小シェリング版（Schellings Werke, hg. von M. Schröter, München 1927ff.）にしたがい、巻数と頁数のみを記す。『世界の年代』の前二稿はシュレーター編集のもの（Die Weltalter. Fragmente. In der Urfassungen von 1811 u. 1813, hg. von M. Schröter, München 1966）にしたがい、オリジナル版にしたがった巻

数と頁数を示す。

参考文献

- カント（平田俊博訳）2000「人倫の形而上学の基礎づけ」『カント全集』第7巻、岩波書店。
- シェリング（藤田正勝訳）2011「人間的自由の本質とそれに関連する諸対象についての哲学的探究」『シェリング著作集』第4a巻、燈影舎。
- ハイデガー（高山守他訳）2011『シェリング『人間的自由の本質について』』創文社。
- 松山壽一 2013「自然今昔または意志としての自然——シェリングとショーペンハウアーの自然哲学と意志形而上学」『ショーペンハウアー研究』第18号。
- Hogrebe,W., 1989 ,Prädikation und Genesis.Metaphysik als Fundamentalheuristik im Ausgang von Schellings》Die Weltalter 《 Frankfurt .
- Wieland,W.1956,Schellings Lehrer von der Zeit.Grundlagen und Voraussetzungen der Weltalterphilosophie,Heidelverg

ⁱ なお我が国におけるホクレーベの受容の状況については、拙稿を参照（「これまでのシェリングの Ungrund 概念の研究状況からみた Ekstase への道」『ショーペンハウアー研究』第19号、近刊）。

ⁱⁱ いちいち書名は挙げないが、ラカン派の精神分析に基づいた社会批評をおこなうスラヴォイ・ジジェクがしばしば後期シェリングの議論に注目するのは、こうした背景があるからではないのか。

ⁱⁱⁱ いささか旧聞に属するが、一時期加藤典洋の『敗戦後論』（1997年）が話題になったのは、加藤が精神分析的な視点で日本の歴史分析を読み解いたからではないのか。

^{iv} 本書32頁参照。

キーワード 悪（論）、過去、神話（論）